からむし
67
麻生区文化協会会報

消える昭和のロマン

柿生駅前商店街

小田急線が昭和二年に開通しました。

当時柿生の中心で村役場、郵便局、学校、駐在所があった所なので、この地に柿生駅が開設となり、商店街もでき活況を呈するようになり、地元の人たちはこの商店通りで毎日の買い物をしておりました。子供の頃はおもちゃや駄菓子を買うのが楽しみでした。

その後、平成になり新しい業種の店舗も増えて、この地域の開発計画もありましたが頓挫して、昭和の面影が残り現在の商店街になってきました。

思い出深い商店街が無くなるのは一抹の寂しさがありますが、新しい商店街の誕生を楽しみにしたい。

この商店街も市街地再開発事業計画が進んで二〇二一年には解体工事が始まり二〇二五年には高層マンションと低層の商業施設と快適な未来都市型の新しい街が誕生する予定です。

宝塔様って何？

商店街の中央に高さ二メートルの石塔「宝塔様」があります。大正時代に長福院の丘からこの場所に移築されたもので、塔の正面には「南無妙法蓮華経」と、裏面には寛政十己未歳（一七九五年）十一月大吉辰と書いてあります。

建立者は、六カ村の人々が講中をつくり、集い合い先祖の霊を弔い信仰を深めてきました。江戸に炭や米を輸送するとき通行人は宝塔様に安全祈願のお参りをして向かったそうです。

絵と文　佐藤英行

からむし六十七号のラインナップをご紹介します

P1 **麻生区の風物紹介**
今号は佐藤英行さんによる「消える昭和のロマン 柿生駅前商店街」。まもなく再開発で姿を消す商店街をスケッチと文で紹介します。

P2 **麻生市民館長 野口聡さん**
四月に着任された野口聡さんはもっと身近な市民館を目指し、交流スペース創設等に取組みます。

P3 **オリ・パラでつくる文化・麻生**
菅原会長は「オリ・パラを身近に感じることのできる文化の祭典を」と熱く語ります。

P4 **「カフェ・グランデ あさお」報告**
十月二十九日に開催された芸術・文化交流カフェ。区のイメージソング「かがやいて麻生」制作のいきさつ等を紹介します。

P5 **俳句講座で映画「天地悠々」上映**
現代俳句の巨匠金子兜太の晩年を記録した映画のサワリをアカデミー部横川さんが紹介します。

P6 **夏休み親子教室 新たな取り組み**
恒例の夏休み親子教室、はじめて新たな一歩を考える会を開催。今後に向けた課題を話し合いました。

P7 **第三十一回俳句大会および文化祭の報告です。**

P8 **会員の活躍**
二科会員の佐藤英行さんが出品作を楽しそうに語ります。藤間勘七孝さんが「やさしい日本舞踊」公開講座を紹介します。麻生フィルが交響楽祭で演奏しました。

未来の創造に役立つ 市民館を目指して

麻生市民館 館長 野口 聡

本年四月から麻生市民館長としてまいりました野口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

麻生区は異なる専門領域を持つ大学が複数立地し、市を代表する芸術関連施設が数多く存在し、これらを拠点とした芸術のまちとしての取り組みがとても盛んです。着任して以来、アルテリッカをはじめ、音楽祭、合唱コンクール、舞台、展示会等さまざまな文化・芸術のイベントを経験し、地域の皆様の意識の高さを実感しております。また、こうしたイベントが日頃より自然に行われていることに感動の念を抱いております。

一方では、豊かな自然を背景に育まれた伝統文化も数多く残っています。すこし足を伸ばせば、徒歩圏内に里山や田畑など草花や鳥のさえずり等で四季を体感できる風景が残り、地域の生活環境の中に歴史的遺産が違和感なく存在していると感じています。麻生区は先進的かつ本格的な文化的刺激に満ちていながら、自然に囲まれた人間的な生活をも享受できるまちと言えます。

こうした麻生のまちで、文化・芸術を通じて仲間を募って活動されている麻生区文化協会の皆様と共に時間を共有できることは私にとりましてたいへん大きな喜びとなっております。

ある時、麻生区文化協会会長の菅原様から、文化協会に対する言葉を尋ねられました。私はその時、『変化と未来』という言葉をお返しいたしました。

文化とは、幅広い意味があると思いますが、私は、日々変わりゆく人間の価値を変わらないものに変えていく作業だと思います。この考えにいたったとき、温故知新という言葉を思い出しました。古きをたずねて新しきを知る。もっとも知られた論語の言葉の一つです。文化協会の皆様は、日々文化を深く研究しさまざまな本当に幅の広い活動をされているわけですが、地域の方は、そうした活動に接することにより、新しい知識や見解、意義を見つけているのだと思います。不変の文化に人々が接したときに、各々の中に何か新しいものが生まれ、そして未来の創造につながっていく。こうした一連の活動を通して、人間の文化は発展してきたのだと思います。市民館もそうした未来の創造の舞台の一助になれれば幸いと思っております。

市民館は日頃の活動の成果を発表する場となることで、多くの方に芸術・文化の素晴らしさを伝える役目を担っています。そして、より多くの方々に文化・芸術の活動を知らしめることにも役立つと思います。例えば、漠然と芸術・文化活動に関心を持ちながらも今一歩活動にまで踏み出せないでいる人や、自分一人では何をどう始めたら良いかわからない人などを想定して、皆で活動することの楽しさや、気軽に参加できる様子を作品展示と併せてアピールできれば参加者の増加につながり、グループの活動の活性化も期待できるのではないでしょうか。市民館を利用されております皆様を見ますと、同じ趣味・価値観でつながった関係をきっかけとして、ライフスタイルや様々な生い立ちの方々が顔の見える形でつながり、精神的に豊かな生活を送っている様子が伺えます。そして一緒に活動しているメンバーとはお互いの悩みや課題も共有するようにもなるでしょうし、そこから解決策をみつけたり、さらにはグループで地域の課題の解決に取組むところまで発展するかもしれません。これはフェイス・トゥ・フェイスの関係だから生まれるもので、ネットを通じた関係ではなかなか難しいのではないでしょうか。

地域のコミュニティの重要性が見直されるなか、現在、川崎市では「これからのコミュニティ施策の基本的な考え方」が示され、市民創発による持続可能な暮らしやすい地域づくりに向けて取り組みを進めております。この点で市民館は地域に根ざした施設として、人々が気軽に集えてコミュニティのきっかけがつくれるような存在と言えます。現在、麻生市民館では、交流スペースの創設と広報スペースの効果的・効率的な活用について取り組んでいます。交流スペースでは、休憩やちょっとした打ち合わせに使える空間を提供いたします。また、文化センターを利用される人々の動線に基づく効果的・効率的な広報スペースを工夫することで、市民館や事業等をより知っていただくことができると思っています。こうした取り組みによって、市民館を利用する方もしない方も気軽にお越しいただける場を作り、より多くの方を取り込むような動きに広がれば、コミュニティの活性化が進み、皆で支えあって、誰もが住みやすいまちになっていくのではと思います。

これから市民館長として多くの事を学んでいかなければなりませんが、皆様のお役に立てるような市民館の姿を思い描きながら、文化・芸術を始めとした市民活動、地域活動を支える役割を担っていけたらと思います。地域の皆様のお役に立てるよう努力していきたいと思っております。

オリ・パラでつくる文化・麻生

麻生区文化協会　会長　菅原　敬子

オリンピック・パラリンピックは国をあげての大事業であり、もうすぐ開会となる今、どこを向いてもオリ・パラであふれています。一九六四年の東京大会開催は国をあげ、戦後復興をめざしての取り組みでした。大規模な東海道新幹線の建設とともに、道路の整備などハードへ力が注がれ、その遺産はその後の日本の高度成長に大いに貢献しています。今取り組まれているオリンピック・パラリンピックは私たち、そして後世に何を残せるのでしょうか。

◆オリンピック・パラリンピックはスポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあります。それは二〇二二年のロンドン大会が示してくれているように思います。

ロンドン大会では二〇〇八年の北京大会終了後から四年間に文化(cultural) オリンピック(olympiad)が実施され二〇二二年にはそのフィナーレとしてオリンピックの開会の一ヶ月前からパラリンピック閉会までの二ヶ月半の間、ロンドンにおいて「ロンドン二〇二二フェスティバル」という大規模な芸術祭が開催されたのです。同時に障害のあるアーティストや芸術団体の作品によるパラリンピックの精神に則ったプログラムも実施されました。

スポーツと同様にオリンピック・パラリンピックの持つ価値を最大に活用することで誰もが文化芸術活動に親しめ、参加ができるまち、街づくりを進めたのです。その取り組みと発想のすばらしさに学びたいと思うのです。

◆東京二〇二〇大会では九万人以上の大会ボランティアが活動への意欲を持ちその実施の場を求めていると報道しています。

オリンピックを好機ととらえ参加することも意義があります。大いに盛り上げて欲しいものです。

又、もっと身近なところでの活動の場や参加のできる場がひろがってほしいと思うのです。スポーツのみならず文化的祭典のための体制づくりです。市民・事業団・団体・行政等々との連携や協働等も必要です。

◆二〇一九年九月に開かれたカフェ・グランデ あさお(あさお芸術・文化交流カフェ 全体交流会)等でみえた活動の交流・取り組んでいる人々・顔々がつながり、それが大きな宝物となるように思います。そうした誰もが文化活動に取り組み親しんでいるまちとして文化芸術のかおりを感じていただけるようなあさおの街をつくっていきたいものです。

◆川崎では川崎市制百年(二〇二四)をオリンピック後に迎えます。一〇〇年目の川崎の顔、今から意識をもって川崎づくりを進めてほしいものです。そのための文化芸術活動を積みあげていかなければならないのではと考えます。オリ・パラに向けて二発の大花火が打ち上がるまでは賑わっていた川崎の街々がオリ・パラが終わると一瞬にして静まりかえる、そんな街にしてはならないと思います。

特に、川崎の中でも誇れる麻生のブランド力「文化・芸術のまち」としての花が咲き続けられるようにしなければと思います。あさおのまちを訪れた人々があさおの芸術性と文化のかおりを感じられるような街にするためのオリ・パラ麻生文化をつくっていきたいものです。

◆文化芸術の資源として日本映画大学やアートセンター、昭和音楽大学などの文化提供と二〇二〇年に開催される「第十二回アルテリッカしんゆり芸術祭」ではオリ・パラをも視点にもち、障害者の参加の機会や場の設定をし、しんゆり芸術祭を成功させたいものです。

オリ・パラを身近に感じることのできる文化の祭典として花を咲かせようではありませんか。

◆二〇一九年十月二日、行政・文化財団・関係団体との懇談会を開催し、文化協会にたいする率直な意見を頂きました。その席上にて頂いた「一文字・一文」は次のとおりです、この頂いた言葉を大切に「新しい風と創造」を目標に一歩を進めて参りたいと思います。

○全ての世代・分野・心のバリアフリー
など、つなぐ力を持っていると感じ
期待しています。
麻生区区長　多田　貴栄　様

○益々の発展を
麻生区副区長　野本　宏一　様

○未来と変化
麻生市民館長　野口　聡　様

○先導と支援、地域の良きリーダーであり様々な活動の下支えにもご尽力いただいており敬服しています。
文化財団理事長
多田　昭彦　様

○元気いっぱいの愛
アートセンター
館長　長谷川　幸雄　様

○共に
アートセンター
副館長　渡邊　栄一　様

○連携
プレルーディオ
代表取締役　石井　郁朗　様

○サロン文化の創造・創る
あさお市民活動サポートセンター
理事長　植木　昌昭　様

○絆
しんゆり芸術のまちづくり
理事長　白井　勇　様

○展がる文化協会
あさお芸術のまちづくり
コンサート委員長　丸山　博子　様

○創ろう麻生区を芸術の街に
麻生区美術家協会
会長　佐藤　英行　様

麻生区芸術・文化交流カフェ全体会議
「カフェ・グランデ あさお」報告

NPO法人「しんゆり・芸術のまちづくり」と麻生区が共催する芸術・文化交流カフェ・全体交流会が、九月二十九日(日)午後二時から四時半にわたり、新百合トウェンティワンホールで開かれました。

芸術・文化交流カフェは、麻生区民会議の提言を受け、二〇一五年にスタートした区内の芸術文化団体の情報交換の場で、アートセンターで年二回程度開催されてきました。

創立50年を迎えるゆりがおか児童合唱団

今回開催されたのは芸術・文化交流カフェの全体会議です。文化協会からは、佐藤が企画委員として開催に協力しました。

芸術文化関係の三十団体約百二十人が参加しました。

プログラムは二部に分かれ、第一部では、「麻生区イメージソングかがやいて麻生をテーマにしたコンサートとトーク」が、第二部では、「映像とトークで綴るあさお芸術・文化のまちづくり」がありました。

第一部では、はじめに、藤井大輔さんの指揮でゆりがおか児童合唱団の子どもたちが

一 うたえバンバン
二 君をのせて
三 好きですかわさき愛の街
四 かがやいて麻生

を合唱しました。

ゆりがおか児童合唱団は一九七〇年に創設された小二から高三までの子どもたちで構成される合唱団です。来年は五十周年を迎えます。

ちなみに藤井大輔さんはゆりがおか児童合唱団出身です。

ついで、麻生区のイメージソング「かがやいて麻生」について、昭和音大准教授の豊住竜志先生、同教授の川染雅司先生のお話とピアノ演奏がありました。

この曲は、麻生区の代表的な芸術関連事業である「麻生音楽祭」が二〇〇五年に第二十回を迎えることを記念して作られました。

歌詞は公募され、全国から総数百三十作品、幅広い世代からの応募がありました。その中から、最優秀賞に選ばれた星合節子さんの歌詞に、昭和音楽大学の豊住竜志先生が作曲して完成しました。豊住先生は、区のイメージにふさわしい曲をつくるために、麻生区全域を回って印象を焼き付けたということでした。

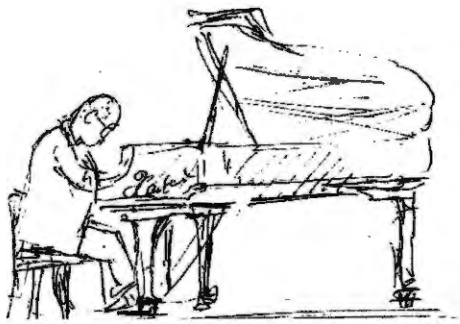
この曲がたくさんの人に親しめるように、映画音楽的な管弦楽バージョン、ポップスバージョンなど現在八種類の多彩な編曲の楽譜があると川染先生は話されました。

最後に先生のピアノ演奏で参加者全員で「かがやいて麻生」を歌いました。

豊住先生

第一部の最後は、昭和音大の川染先生のピアノ&トークで、以下の五つの曲のピアノ演奏をされました。

一 ベートーベン ピアノソナタ ハ短調 第二楽章
二 モーツァルト トルコ行進曲
三 ショパン ワルツ変ニ長調 ノクターン嬰ハ短調
四 ドビュッシー 亜麻色の乙女
五 シベリウス 樅の木



川染先生のピアノ演奏

そして、作曲者について楽しい解説をされました。例えば、ベートーベンは、ドイツのボンで生まれたが、一八七八年にモーツァルトに憧れて、ウィーンに来た。モーツァルトはザルツブルグに生まれたが、この街は岩塩鉱の故に裕福な街であった。裕福なモーツァルトはヨーロッパ中に遊学し、方々に足跡を残している…などなど

第二部「映像とトークで綴るあさお芸術・文化のまちづくり」では、はじめに岩倉宏司さんが「しんゆり・芸術のまちの歩み」を解説しました。次いで映像が上映され、地域が整備されていくとともに、昭和音大・日本映画大などが誕生、アートセンターなどができて、麻生音楽祭、しんゆり映画祭など芸術・文化の街が形作られていく様を映像で紹介しました。

ちょっと残念だったのは、音楽イベントが中心で、美術工芸・いけばな・俳句などの文化活動が紹介されなかったことです。

このあと、懇親会に移り、ネクストステージ十に向けて、参加者(団体)から一言ずつの発言があり、互いに親交を深めました。

最後に「しんゆり・芸術のまちづくり」理事長の白井勇さんから、「皆様の声を活かしてよい街づくりをしたい」と結びました。

(絵と文 佐藤勝昭)

白井さん

アカデミー部　俳句講座

映画「天地悠々・兜太俳句の一本道」

『俳人金子兜太の世界』

アカデミー部では例年、夏に三回の俳句講座を開催してきたが、本年度は昨年二月に亡くなった俳人金子兜太を撮ったドキュメンタリー映画「天地悠々」上映会二本に絞り企画することとなった。

この映画については現代俳句協会の機関誌「現代俳句」二月号に監督の特別寄稿が掲載され、また都心の会場においてすでに上映会も実施され始めるなど、注目を集めている作品であるのでぜひとの思いもあった。文化協会関係者の協力、各俳句会の支援などにより、十月八日の上映会は市民館大会議室が満席となり、鑑賞券の要望にお応えできぬほどの盛況であった。映画に続いての河邑監督と兜太の創刊した句誌「海程」の初代編集長であった俳人酒井弘司さんのトークによってさらに厚みが増し質の高い俳句講座となった。

撮影は兜太最晩年の七年間に行われたものという。しかし古い写真や関連する景色の映像、そしておりおりに画面に大写しされる俳句について本田博太郎の朗読に続いての兜太自身の語りによる回顧的解説によって、映画は兜太の生涯を語るに十分な存在感のあるドキュメンタリー作品に仕上がっており、かつてNHK番組の「シルクロード」で名をはせた河邑監督の手腕さすがと思わせるものがあった。

金子兜太　大正八年埼玉県に生れ、父は医師、秩父皆野町で育つ。昭和二六年東京帝大経済学部入学加藤楸邨「寒雷」に二句初入選、昭和二八年主計中尉としてトラック島に赴任、終戦、米軍捕虜となり、昭和二二年復員。日銀に復職、昭和三二年頃より俳句専念を期す。昭和三七年同人誌「海程」を創刊、昭和五八年現代俳句協会会長に就任、平成三二年までの十七年間を務める。朝日俳壇選者でもあった。　平成三〇年二月逝去

映画には三十一句が登場したが、兜太自身が原点の句と言っている一句と作句にあたり主張した造形俳句（前衛）の代表句一句を兜太の「語り」と共に紹介、加えて晩年の俳句観について語った部分も紹介されている。

1.　兜太俳句の原点（平和の希求）

水脈（みお）の果て炎天の墓碑を
置きて去る　　兜太（昭和二一）

『決定的に私の転機ですか、一生を支配した句っすね。戦後の生き方の原点。丁度最後の引き揚げ船で帰ってくる時の、水脈のはてにこう、夏島って島がありましてそこへ墓碑を我々で作って原住民に立ててくれってあずけて我々は船に乗ったんですが、それがずぅーと環礁の外へ出てく、その島が遠くなってく、そん時に思わず出来ちゃったんですね。

夕焼けの中の白波の向こうに夏島があって、そこにあの墓碑があると、あの墓碑、たくさんの人が死んだ。俺は妙に不思議に生き残ったっていうようなそういう思い、多少慚愧の思いみたいなのがあって、それでそれを噛み締めてずぅっと行って、その時にヒュッと出来た。でなんとか帰ったら、この人たちのためになることっていうか尽くせることをやりたいなという風にまっ、若いですからね、まだ二十六でしたからな、若いもんですから必死にそう思っておったということでしょうかね、ええ。』

2.　兜太俳句の前衛性

彎曲（わんきょく）し
火傷し爆心地のマラソン
兜太（昭和二三）

『やっぱりこれですねぇ、私の評価、俳壇の評価としても、金子前衛なるというようになった切っ掛けですね。ま、自分では前衛なんて言葉大っ嫌いなんですけどね…。心ある先輩たちはそこまでよくやったと言ってくれましたけども。

ちょうど長崎に行って間もなくですね。爆心地のそばに小高い所がありまして、そこに銀行の社宅ができていたわけです。それで爆心地をグルグル歩き回ってそれで出来たとそういう句です。なんていうかやっぱり人間はしぶとい。こう真っ黒焦げになってましたけど、真っ黒焦げになったところに小屋ができて人が生活してるんですね。そういう生命力にちょっと感心しましたねぇま、同時に悲惨な感じがどうにもならないんで、私の映像の中ではその周りが峠になってますからこう盆地みたいになってるとこですから、その峠みたいなところから、あのーマラソンの選手たちがこう若く元気よく走ってくる。ずぅーと走ってきてその爆心地入ってくると同時に焼け爛れてコロコロッとなって、あるいはヨタヨタと走ってしまう。そういう映像が出てくるんですね。原爆の痛みを案外知らない間に喰ってるんじゃないか、そんな思いも込めて句が出来た。映像で出来たもんですから、それで自分で得意でした。それで映像で書くというのが私の現代俳句としてのいちばん最高の書き方だとその頃から思ってましたから、手法としても良い句ができたと思ったのを覚えております。』

3.　兜太の尊敬する俳人と俳句観

『尊敬ちゅうよりも、愛し好むのは小林一茶です。庶民の世界で本物の俳句を作ったのは一茶だと思います。それから明治になって、連句から俳句をだけ独立させたのが正岡子規ですね。だから正岡子規の英断は素晴らしいことだと思います。従って庶民の立場から非常に頓もしいもの、作品を書いた一茶と、それから俳句っていう形式を独立させてこれを近現代史の中に入れようとした子規の努力っていうのは大変なもんだと思います。子規の写生っていう考え方は、いつも念頭に置いております。

そして、写生を客観写生にだけ傾けてしまって、客観だ主観だって考え方を持ち込んだのは虚子なんですよ。だけど今はもう一緒になって考えられてるわけですから私は二応映像って言ってますけども。その映像という形でそういうものを一緒にした捉え方をしてくっていう、そういう世界が現代俳句で求められてきた。それが実行されていけばですね、水準の高い俳句が一層生まれてくると……自信をもってます。それで結構我々もやってきたけど皆死んじゃいましたね。私だけ残ってんです。』

俳人として最後まで変節することなく天地悠々、生き切った兜太の生き方は魅力的であり、最後の句として登場した辞世の句の暖かさ穏やかさに名残りの尽きぬ思いである。

陽の柔ら
歩ききれない遠い家
兜太

（横川はっこう記）

＊兜太の語り文章は天地悠々プログラムより転載

夏休み親子教室

新たな一歩を考える

夏休み親子教室は七月二十六日から八月十六日まで十六の教室が開かれ、二百八十名の参加がありました。

本年も講師をはじめサポーターの方々のご尽力により、文化・芸術・自然科学など盛り沢山の教室が実施されました。

『文化協会のめざす「新しい風と創造」をふまえ、新たな取り組みも徐々に、加わってきました。

令和の時代の歩みを見据えた思考や発想の転換を図ることが必要である』との橋本周実行委員長の提案により、講師、サポーター、役員による「夏休み親子教室を考える会」が八月二十七日に開かれました。

以下に参加者から頂いたいくつかのご意見や提案を紹介します。

☆参加者、保護者に関して

・応募者の多い教室は、抽選で参加者を決めた。当日の無断欠席は、教室によっては材料の準備や指導にあたる側に支障をきたした。

・教室に関する案内の内容を読んでいなかったり、十分に理解していない保護者からの問い合わせが多かった事は考えさせられた。

・教室の日程の組み合わせや所要時間についても見直しが必要ではないか。

☆講師の先生から

・案内要項だけでは内容が十分理解できない教室もあり、見直しの必要がある。

折り紙で切り絵

・学年により、能力に差が出るので、時間的に難しい面があり、受入れ人数の見直しを考えたい。

・教室によっては、道具等の準備や片付けなどにサポーターのさらなる協力があると助かる。

・参加者はみな礼義正しく、熱心に取り組んでいた。

・家族ぐるみの見学者もあり、親子で体験してもらうことができたのはよかった。

☆サポーター・実行委員から

・自然科学系の教室がもう一つぐらいあっても良いと思う。

・各教室とも子どもたちが楽しく学び、技を習得できた。

お手玉を作ってあそぼう

・作品をもち帰るなど、達成感をもてたようだ。

・生け花では、先生方が各流派を超えた新しい指導法で子どもを指導されていた。

・琴平神社では教室に加えて、恒例の西瓜割りなどがお楽しみとなっている。

・日常生活で針を使う機会の少ない子どもたちには、糸通しから針の使い方などの指導方法を考えたい。

・先生方のご苦労やアイデアが感じられ、教室に対する意気込みが素晴らしかった。

親子教室のこれから

最後に実行委員長が、以下のように締めくくりました。『親子教室は親と子で参加することに意義があるという意見はもっともだが、教室の定員枠で受け入れが難しい教室もある。

伝統文化の継承と自然科学などを令和の時代にうまく融合させていけたらよいのではないか。

最近では、同じような子ども向けの企画が外部の学校や施設などでも行われている事を勘案し、今後も文化協会としての特色のある事業にしていきたい』。

（関森 田鶴子記）

鶴見川と生き物

お箏を弾いてみよう

第三十一回　麻生区俳句大会

実行委員長　山室　茂樹

令和元年、第三十一回麻生区俳句大会には一四八名の皆様より四九八句の応募を頂きました。

また第六回目の小学五年生の部にも四五七句の俳句と絵の応募があり、応募句全てを区役所ロビーに展示しました。

【一般の部　入選句】

○川崎市長賞
大空の縫ひ目のやうに鳥渡る　池内　秀夫

○川崎市議会議長賞
山百合を植えて麻生を故郷とす　稲垣　鷹人

○川崎市教育委員会賞
滴りのどれもが光もて生るる　雨宮　寿美子

○麻生区長賞
合宿の瞳あつめて夏銀河　岩田　輝夫

○麻生市民館長賞
月涼しカフカの住みし石の街　都留　嘉男

○川崎市総合文化団体連絡会理事長賞
組まれたるままの足場や梅雨長し　藤森　成雄

○川崎市観光協会会長賞
愛犬と同じ花柄更衣　本玉　秀夫

○麻生観光協会会長賞
白塗りの子役が泣かす夏芝居　井上　美沙子

○麻生区文化協会会長賞
地下鉄の長き階段梅雨湿り　関森　田鶴子

【優秀賞】

その後は星に託して霊送る　小林　三千子
鬼くるみ味はひ深き兜太の句　山室　みゆき
縁側といふ応接間西瓜切る　安楽　昌泰
地方紙につつまれ届く夏野菜　市塚　茂二郎
ポケットの鍵と取り出す木の実かな　池之上　輝夫
音の差は江戸か南部か軒風鈴　玉川　考月
新宿は柱状節理いわし雲　石原　弘二郎
いっさいの音を拒みて滝凍る　佐藤　次郎
青柿落つ今日の重さの音立てて　馬場　身江子
二番目より以下同文と卒業す　橋本　周
愛着の古びし箸や冷奴　大谷　袈裟次
梅雨空へ放り投げよか金平糖　芹澤　祥子
手を握るだけの見舞や鳳仙花　中野　英歩
八幡平秘湯にすくふ星月夜　上野　浩
重き闇動かしゐたるいとどかな　鯉渕　洋子
海鳴りや兵の慟哭八月忌　笠原　秋水
猫自慢聴きて帰れぬ盆の僧　河野　眞砂子
赤紙の薄き重さよ敗戦日　松成　英子
月下美人産み月の娘の深眠り　岩澤　佳音
目を細む木喰仏や秋澄めり　深野　怜
仏壇の写真と話す盆用意　早瀬　雅子

【席題入選句「泥」または「新」を読み込み】

一位　ノーサイド泥の抱き合うラガーマン　秋山　ますみ
二位　新しき天守の反りや天高し　高松　たまき
三位　古墳へと続く新道野菊晴　岩澤　佳音
四位　酔へばもう古酒も新酒も無き御仁　安楽　昌泰
五位　災禍なき報せ新米届きけり　山口　ちひろ
六位　水鏡して新秋の深さかな　小林　三千子
七位　新松子残して庭師切り上げる　早川　靖子
八位　氾濫の千曲の泥や秋寒し　深松　サダ
九位　被災地の泥の足跡木守柿　関森　田鶴子
十位　泥水を垂らして起きる尾花かな　滝澤　義忠

【小学五年生俳句優秀賞より】

花火もつ小さないとこと手を重ね　西生田小　村上　愛真
夏休みたいくつそうなこうていだ　麻生小　葛城　杏里
夏休み野口英世にあこがれた　栗木台小　渡部　泰知
ひまわりは君の笑顔にそっくりだ　百合丘小　大潟　佳澄
おじいちゃんがんばり育てた小さなスイカ　南百合丘小　武吉　優菜
花火散る夏の終わりのさびしさよ　はるひ野小　工藤　大和
西瓜割り指示で動いて空を切る　王禅寺中央小　白川　結人

第三十五回　麻生区文化祭報告

十月六日(日)の麻生フィルの演奏会からスタートした麻生区文化祭は来年三月七日(土)の文化サロン部のイベントを残すのみとなりました。各部門の皆さん、ご苦労様でした。サロン部のイベントの盛会も期待します。さて、十一月十三日(水)に次年度に向けての反省会を市民館第一会議室で行いました。

以下は各ジャンルからの報告です。

美術工芸展(入場四三名)

開催日の中に休館日があるという手違いで五日間しかとれず、悪天候も重なって入場者数は例年より少なかった。熱心な参観者も多く、嬉しかった。

管弦楽・第六十九回定期演奏会(入場六九三名)

この時期、他にも演奏会が重なり昭和音大ではオペラをやっていて観客数を確保することは厳しかった。全体に素晴らしい演奏だったとの感想が多く寄せられた。ヴァイオリンのブーレ氏は上麻生在住で昭和音大で教えておられるが、フランスでは重鎮で、共演の機会をもてたことは幸せだった。

講座・映画「天地悠々・兜太俳句の一本道」とお話(入場一四〇名)

アカデミー部主催の俳句講座については、五ページに実行員会の横川さんがくわしく報告されている。チケットは有料だったが、大会議室は満員盛況で、さすが文化人の多い麻生区だからこそできた講座であった。

邦舞・邦楽演舞会(入場五〇〇名)

一部はそれぞれの会の発表会で二部は各会の先生方の踊りでさすが圧巻だった。自分たちが踊ったら帰ってしまうので、終演で麻生祭りの時には十五人ほどで寂しかった。人の踊りも見て学び、みんなで演舞会を盛り上げるようにしたいものだ。

吟舞・吟詠(入場一〇〇名)

動員は少ないが、若い人が増えたことは今後に希望が持てる。レベルが上がったと感想をいただいた。

洋舞・あさお洋舞ぐるーぷ七団体(入場一〇〇〇名)

今年は最後まで客席が満杯だった。プログラムも色々なジャンルがあり喜ばれた。開場前に小雨になり長蛇の列で並ぶ人に申し訳なく十五分前にロビー開場にしたが、整理券配布も今後必要かと思う。

俳句大会　については、この上の七ページをご覧ください。区長・市民館長は、お忙しい中、全てのジャンルを鑑賞してくださいました。ありがとうございました。

(小田島　紀美記)

会員の活躍

大盛況な二科展
佐藤 英行さん語る

芸術の秋をかわきりに国立新美術館で第一〇四回の二科展に麻生区美術家協会会長の佐藤英行さんが今年も二科会員として見事な作品を出展されました。佐藤さんは3・11の大震災の津波の作品が上野の森美術館大賞を受賞されるなど素晴らしい画伯です。今回も大盛況な二科展の状況を、優しい笑顔で楽しそうに語って下さいました。

『今年も十万人も入場する本展も大変な賑わいで二年間の成果の発表の場です。九月四日オープンから二科展のお祭りが始まり、全国から二科ファンが六本木のいたるところで酒盛りが始まり、毎日深夜まで続きます。こんな美術公募展ですが、みんな自己主張が強く芸術論を語り熱くなるのです。

今年の私の作品は「孤独」（F百三十号）北陸の海辺酒場で一人ゆったりと地酒を飲んでいるカウンターには、黒猫、床には犬が寝そべり、そのような情景を半抽象的に表現した作品になりました。』

（橋本 周記）

「親子で楽しむ やさしい日本舞踊」を指導
邦楽芸能友の会 会長 藤間 勘七孝

あさおサークル連絡会主催の秋の公開講座で、日本人なら誰でも知っている曲「さくらさくら」の日本舞踊を、この秋十月の土曜日に三回シリーズで行いました。普段活発に動き回っている子供達も浴衣姿になるとやっぱり可愛い日本の女の子に変身します。

今回はお母さん方も子供さんも踊りが初めてで浴衣の着方も初めての人が多く、先ず着付の指導から始まり、きちんと正座して背筋を伸ばしたご挨拶の仕方、扇子の持ち方、開き方閉じ方などを練習しました。

「さくらさくら」の踊りが始まると、みんなで口ずさみながら一生懸命まねをして踊りに夢中でした。お母さんと子供は親子で一緒に踊るのが嬉しそうでした。慣れない女舞の内股歩きも三日目の仕上げには皆揃っておしとやかに上手に踊れるようになり、楽しいお稽古をこれからも続けたい人もいて、私も嬉しく思いました。

日本舞踊を通して私は日本人の礼儀作法、女性のやさしさ、情感の豊かさを学んでほしいと願いながら長年指導を続けております。十二月一日(日)の第三十五回「邦楽祭」(麻生市民館大ホール)にもぜひお出かけください。

ミューザ川崎 シンフォニーホール 開館十五周年

ホールが開館して今年は十五周年ということで、八月二十五日に「ミューザ川崎 市民交響楽祭二〇一九」が川崎市内の四つのオーケストラの合同で演奏会が開催され、麻生フィルからも二十五名が参加しました。演奏された「白鳥の湖」ではナレーション入りだったので、お話しの筋と曲がよくわかり、観客も引き込まれたようで、アンケートでは「アマチュアの演奏とは思えないほどだった」の声もあるほどでした。

（横須賀 朝子記）

文化協会のこれから

あさお古風七草粥の会

◆一月七日(火) 麻生区役所前広場

恒例の七草粥の会、約千食用意します。お囃子、あさお童謡をうたう会の合唱、カルタ取り等、楽しいイベントが盛りだくさんです。お誘いあわせの上お越しください。今年は何度も災害に見舞われました。七草粥の会では、募金活動を行いますのでご協力下さい、事前準備にもご協力ください。

一月五日(日) 七草摘み
一月六日(日) 仕込み・会場準備

アルテリッカ新ゆり美術展

◆三月二日(月)～三月八日(日)
新百合トウェンティワンホール

麻生区文化協会・麻生区美術家協会と川崎市文化財団の合同主催で行われる恒例の美術展。絵画・彫刻・工芸・写真・いけ花の他、民藝の女優さんを描くデッサン会作品展示もあります。

◆オープニングパーティ 三月二日 十七時～

文化サロン部イベント「かわさきパラムーブメントin麻生」

◆三月七日(土) 午後一時半 大会議室
講演とワークショップ
「かわパラ音頭」を踊ってみよう。

令和二年度麻生区文化協会総会

◆四月十八日(土) 大会議室

編集後記

年号が変わり半年余りが経過し、二〇一九年度文化協会の活動・諸事業も、ほぼ計画通りに実施されてきました。新たなチャレンジも少なからずみえますが、「新しい風」は微風？程度でしょうか。今年各地を襲った台風程の暴風でも困りますが、創造性豊かでハイレベルな活動を期待します。

日常、「カイゼン」を積極的に進めている企業の技術者の方に伺った話を思い出しました。「自分の敵は自分」「立ち止まってじっくり考えてから行動するのではなく、『考動』せよ」など、語録は沢山ありますが、【変化しない原因は自己の中にあり、スピード感を持って、動きながら考える】との意味であったと解釈しています。

今年度より編集委員に加わりましたので、自ら心新たに編集に取り組みたいと思います。

（井上 俊夫）

編集委員
井上俊夫、岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本 周

麻生区文化協会会報
からむし 第六十七号
令和元年十二月一日発行
発行人 麻生区文化協会
会長 菅原敬子
編 集 麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺一－五－二
麻生文化センター内
☎ ○四四－九五一－一三〇〇
印 刷 (株)エリアブレイン